

# DRIFTERS—ドリフターズ— 異なる時代の英雄達

金色狼

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

異なる時代、世界から送られてくる者を漂流者（ドリフターズ）と呼ぶ。

この世界は数多の時代、世界から送られてくる英雄達が集う。

そして、彼らがこの世界に送られてきた意味とは

・  
・

——追記——

2016/11/27 タグ「那須家が生んだゴルゴ13」「薩人マシーン」「焼き討ちマシーン」「空の宮本武蔵」を消去しました。「菅野の紫電改はもはや鈍器」を追加しました。

## 目次

飛龍と菅野デストロイヤー	1
元艦艇と現パイロットそれと提督が一人	5
紫電改のパイロットと零戦のパイロット	10
艦娘、提督、パイロット、集合！	14
戦闘機の修理が終わって、やっぱり敵が攻めてくる。	21
空中の乱戦	26

## 飛龍と菅野デストロイヤー

### ◇菅野 直

「九州方面に向けてB―24爆撃機の編隊が北上中である。343空301飛「新撰組」は直ちに出击せよ。繰り返す……」  
待機中に入ったアナウンスはそう告げていた。菅野はその知らせを待っていたかのようにニヤツと笑い外に出た。

「うおし！行くぞ、お前えら！」

「「応!!」」

自分の部隊に号令をかけ、戦闘機「紫電改」に向かっていた。

「343空301飛新撰組隊長、菅野直!!出るぞ！」

紫電改のスロットルを上げ、滑走路を走行し離陸した。

「爆撃機はどこだ!?ああ!?バカヤロウ!!」

「隊長、今離陸したばかりじゃないですか。」

菅野は隊員達と無線で冗談を言い合い、緊張を解していた。

――  
――  
――

### 数時間後

「敵機視認!・B―24編隊です!」

「おっしやあ!!行くぜえ!・コノヤロウ!!」

菅野は独学で発案した「前上方背面垂直攻撃」を駆使し、次々と爆撃機を撃墜していった。

だが、その攻撃は長くも続かなかった。機銃を乱射をしていると左翼から爆発音がした。

「ああ。」

菅野が左翼を確認すると機銃が爆発し、大きな破孔が出来ていた。

「ああ、クソツ!!バカヤロウ!・コノヤロウ!!」

菅野は即座に小隊の二番機に無線に入電した。

「隊長!?大丈夫ですか!」

菅野機に近づいてきたのは掘 光雄飛曹長の乗っている機体だった。

「隊長！自分は今から隊長機の護衛を努めます！」

掘は二番機の任務に則り、菅野機の護衛を始めた。

だが、菅野は、

「うるせえ!!護衛なんざ必要ねえ!とつとと戦闘に戻りやがれ!」

そう言いながら掘機に拳を突き付け戦闘に戻るように促した。

掘はゆつくりと菅野機から離れ、戦闘空域に戻っていった。

「そうすりや良いんだよ。バカヤロウ!」

菅野は数十分飛行を続け、掘機に「空戦ヤメ、全機アツマレ」と入電をした。だが、

「これじゃ、長くは持たねえな。クソツ!」

高度も下がり始め、基地に帰還するのも不可能と判断した菅野は再度、掘機に「ワレ、機銃筒内爆発ス、諸君ノ協力ニ感謝ス」と入電を入れた。

「チツ。短え人生だったな。」

菅野がブツブツと独り言を呟いていると目の前に扉が現れる。

「あ。」

菅野はその扉の中に吸い込まれるように消えていった。

#### ◇飛龍

MI海域攻略戦で艦隊は多数の痛手を受けていた。赤城、加賀、蒼龍は大破。飛龍は小破していた。

周りでは駆逐、軽巡の艦娘達が戦っている。自分たち空母も戦わなければいけないのに、力になれずにいた。

「どうしよう。このままじゃ。」

今現在、航空機を発着艦出来るのは自分だけ。だが、航空機の数も多くはない。

せいぜい零戦が10機、九七艦攻、九九艦爆が数機あるだけだ。

今発艦させたとしても深海棲艦にダメージはあまり与えられない。

発艦させてもさなくても敗北は目に見えている。

敵空母は健在、今にでも艦載機を飛ばしてくるだろう。

そう考えると、まるで心を読み取ったかのように空母は艦載機を発艦させた。

「ここで・終わりかあ・ゴメンね、多聞丸。」

静かに涙を流しながら曇っている空を見上げ、急降下してくる艦載機を見つめていた。

カコンと音をたて、爆弾が雨のように落ちてくる。

「さよなら・、多聞丸。」

飛龍は下を向き目を瞑った。だが、一向に爆弾が爆発しない。

飛龍は困惑した。「なぜ爆発しないのか」「もしかして不発弾？」などど多数の思考が頭の中を駆け巡り、ぐちゃぐちゃになっていった。

おそろおそろ目を開けると目の前に広がっていたのは先程までの地獄絵図とは全く異なる場所だった。

そこは陸で、目の前には朽ち果てた廃屋、形状はどこか鎮守府に似ていた。

「え・どん、こん。」

飛龍は自分が置かれている現状を把握できず、その場に座り込んだ。

あまりの衝撃に呆然と座り込んでいると、遠くから航空機の発動機の音がしてきた。

飛龍は音のした方を向いた。すると自分より大きい航空機がこちらに向かってきていた。

通常、空母艦娘が搭載している艦載機は手のひらサイズの航空機だが、飛龍が今見ている航空機は実物大の航空機だ。

「なんだバカヤロウ!!クソ!クソ!クソ!なアにが起きやがったあ!!」

「え・妖精さんじゃ・ない?」

「どこどこだバカヤロウ!!あ”あ”ー!?!」

航空機のパイロットだろうか、なにかを叫びながら上空を旋回していた。

◇菅野 直

謎の扉に吸い込まれた菅野と紫電改は、空を漂っていた。

扉に吸い込まれたかと思えば、目の前が急に明るくなって空に放り

出されたのだ。

「なんだよ、ここはア!!あ”ア!?”」

無線も繋がらず、列機も見当たらず、途方に暮れていた。

背面飛行をして、眼下を見れば海、水平飛行に戻して上を見れば空。彼方には水平線。回りにはそれしかなかった。

辺りに注意を配り見渡していると、数Km先に孤島が見えてきた。

「なんだアー!ありや!?!島か!?!」

菅野は紫電改のスロットルを上げ、孤島に近づいていった。

そこで菅野が目にしたものは、生い茂る木々、朽ち果てた廃屋、そして、黄色の着物を着た少女。その場に座り込んでいるのが確認できた。

「なんだバカヤロウ!!クソツッ!クソツ!!なアにが起きやがったあ!!」

「どこだここはバカヤロウ!!あ”あ”!?!」

少女に叫びながら問いかけたが、この距離では少女に菅野の声は届かなかった。

どこかに着陸し、近づかなければ話が聞けない。そう考えた菅野は孤島の回りを飛行し、着地できる場所を探した。

すると島の中央に舗装された道があった。雑草が生い茂っているが、着陸出来ないことはない。

菅野は紫電改のスロットルを下げ、ランディングギアを展開、操縦桿を引き、着陸体制に入った。

「まだ落ちんじやねえ。よーバカヤロウ!!」

菅野はただ、墜落しないことを願った。

元艦艇と現パイロットそれと提督が一人

◇菅野 直

「う、ぐ、おおおおあ!!」

重くなっている操縦桿を必死に引き、菅野は舗装された道へうまく着陸した。機体がガタガタと音をたて、地面を走っている。菅野はブレーキをかけ徐々に機体を減速させていく。

止まったと感じると菅野はすぐさま風防を開け、外に出た。周りには木々が生い茂り、鳥の鳴き声が平和そうに響いている。菅野の思考が数秒停止し、呆然としていた。しかしすぐに思考は現実を引き戻された。

「んだよ、ここは飛行場か」

人工物は先程の少女が座り込んでいた場所にあつた大きな赤レンガの廃屋、それと菅野が不時着したこの舗装された道。だが、これを飛行場と呼んで良いのだろうか。

一切整備されていない滑走路、補給するための弾薬も燃料も、戦闘機、爆撃機も無い。菅野の乗っている紫電改はB-24編隊と戦い弾薬、燃料は無しに近い。補給もせず島の探索といって離陸し飛行しても、1時間ともたないだろう。

考えた挙げ句、菅野は徒歩で先程の少女がいる場所へ向かった。

何時間歩いただろうか。行けども行けども景色は変わらず森ばかり。菅野は苛立ちを募らせてきた。

「なんだよ!!行っても行っても森ばつかじゃねえか!!あア!」

叫んでも何も変わらない。木々の揺すりあう音、小鳥達のさえずりが聞こえてくるだけだった。

「ああ、クツツ、めんどくせえな」



そう言った直後、遙か彼方から何かの音が聞こえてきた。

「あア。今度は何だ。」

菅野は自分の耳がおかしくなったのではないか、と思った。何故ならば、聞こえるのだ。かすかにだが、発動機の音が。自分の他にもパイロットがいたのだ。

発動機の音はどんどん近づいてくる。それにつれ、音も大きくなりハッキリ聞き取れるようになる所まで近づいてきた。

「この発動機の音ア。聞いたことあんなア。」

菅野はニヤツとしながらその航空機の名前を言った。

「こいつア。零戦じゃねえか!!」

零戦。正式名称「零式艦上戦闘機」。太平洋戦争初期、世界最高峰の戦闘機として各国から恐れられていた航空機である。

数々の戦いに参加し大きな戦果を上げ続けた。長大な航続距離、強力な武装、そして零戦最大の特徴は格闘性能だった。短い距離で旋回できて、敵機の背後につくのは簡単だった。

菅野は目標を変え、あの零戦のパイロットに話を聞きに行こうと今来た道を帰っていった。

◇坂井 三郎

坂井はガダルカナル攻撃に出撃していた。愛機である零戦を駆りF4Fの編隊を攻撃していた。

F4Fを全機撃墜したかを確認した。だが、まだ1機のF4Fが残っていた。発見したF4Fは黒煙を吹きながら飛行していた。

「あれは簡単に落とせそうだな。よし。」

坂井はそのF4Fに近づき、攻撃しようとした。だが、相手も坂井の接近に気づいたのか坂井機の背後に回ってきた。だが相手は撃つてこなかった。坂井は後ろを振り向き敵機を確認した。なぜ撃つてこないのか坂井はすぐに分かった。機銃が故障しているのだ。故障している状態で機銃を撃てば爆発しかねない。坂井はF4Fの背後を取り返し、格闘戦を始めた。

F4Fは坂井の攻撃で撃墜された。坂井は数時間ガダルカナルの上空を飛行していた。すると遠くに航空機の編隊を発見した。坂井

は航空機の編隊に近づいた。

!?

「ワイルドキャットじゃない！これはドーントレス！」

次の瞬間、後部銃座の銃弾が雨のように撃たれ始めた

坂井は零戦を巧みに操り銃弾を回避しつつ距離を取るが、雨のように撃たれる銃弾を全て避けきれぬ筈がない。発動機に被弾し燃料が漏れ始めている。?

「おいおい、嘘だろ。」

命の危険を感じSBDドーントレスから離れ、基地に向かって飛行を開始した。

その途中で目の前に扉が現れた。

「な。今度はなんだ!？」

坂井機は扉に吸い込まれるように消えた。

坂井は扉から抜け出したと思うと辺りに風景に目を疑った。

先程までのドォントレス群は見えぬ、静かな空と海が見えるだけだった。

「どんだんは。」

今置かれている状況が把握できず、ただ呆然と周りを見渡していた。

零戦は燃料漏れを起こし、今にも発動機が止まりそうだった。

「なんだ、あれは島か。」

島を目の片隅に確認すると機首を島の方へ向け、孤島へ向かっていった。

島が近くなると、赤レンガの廃屋が見えてきた。

「なんだあれは。確か、横須賀や呉にもあれと似たような建物があったな。」

そんなことを思っていると、島の中央に舗装された道が見えてきた。

「あれは・滑走路か！燃料漏れを起こしているからな・不時着するしか、ないか。」

坂井は零戦を降下させ着陸体制に入った。

◇飛龍

「こんな所でうじうじしても、何も始まらない。とりあえず、鎮守府・みたいな建物だけど・入ってみよ。」

飛龍は鎮守府と思わしき建物の中に入った。中は人の手が行き届いておらず、埃っぽい空気が漂っていて、思わず掃除したくなるほどだった。柱には蜘蛛の巣が張っていて、割れた窓から侵入した鳶が壁一面に張り巡らされていた。

「ゴホッ。なに、これ。」

こんな環境だったら、咳をするのも当然だ。

だが飛龍は、こんな所で立ち止まっている訳にもいかず、先に進んでいった。

「鎮守府なら、提督室があるはず。あるよね。」

飛龍は二階に上がり廊下を覗いた。一階と変わらず、埃っぽい。すると、提督室から誰か出てきた。

「誰か出てきた。」

「誰だ？」

飛龍はその声に聞き覚えがあった。MI海戦で自分自身に乗っていた提督。

自分が艦娘になっても忘れない、ずっと探し続けていた人。

「多聞丸。」

「ん？誰だ、アンタは。」

飛龍はハツとした。艦艇の姿だったのに、今は女の子の姿になっているんだ。

ちゃんと説明しないと、面倒くさいことになる。

「多聞丸、私はね・航空母艦の・飛龍だよ。」

「飛龍・あの、空母飛龍か？」

「うんっ。えつと、久しぶり。」

「あの飛龍が。こんなになるんだなあ。」

飛龍の探し続けていた人、山口多聞は飛龍を見つめ「ほお」と感嘆の声を上げた。

「赤城、加賀、蒼龍も。飛龍みたいになってるのか？」

「皆そんな感じかな。」

「私達はね、『深海棲艦』っていう敵と戦う為にまた命を授けられたって。感じ。分かってくれた？」

「いまいち分からんが。今度は艦艇ではなく、人間として生まれ変わったって事か。」

「人間として生まれ変わった。のは間違っていないけど。普通の人と比べて力があるってくらいかな？」

「普通の人間の数倍は力が出るわけか。ほお。」

「と、まあ。再開したばかりだが、話は終わりで。まず、ここについて説明せにやならん。」

「そういえば、ここ鎮守府だよな？ 資材とかは。」

「俺が来たときは、たんまりあったなあ。」

「今は？」

飛龍が首をかしげ、問いかけた。

「今も変わらんぞ。」

「やった！ 補給できるんだ。よかったあ。」

「補給か。そういや飛龍よ。どうやって補給するんだ？」

「あく。教えてなかったね。」

飛龍は艦娘について一から説明を始めた。

## 紫電改のパイロットと零戦のパイロット

◇菅野 直

「あア、長え!!」

菅野はひたすら森の中を走っていた。理由としては先ほど、森の中で聞こえた零戦の発動機の音、これを追って今来た道を帰っていた。「クソー、足場悪すぎんだよ！バカヤロウ!!」

森の中は木々が生い茂っており、所々に根が巡らされていて、雑草も足に絡み付き、バランスを崩せばすぐに転んでしまう。菅野は前に2回は転んでいる。そのこともあり、イライラを募らせていた。

「うおっ!？」

転んだ。木の根に足を引っかけ盛大に、頭から転んでいった。この様をみたら部下たちは笑いを堪えられないだろう。

「痛ってえな、チクショウ。あア!?手前え!!コノヤロウ!バカヤロウ!!」

菅野は足を引っかけた木の根をゲシゲシと蹴っていた。

「こんなことしてる場合じゃねえな。早く行かねえと!」

菅野は脳裏に自分の愛機である紫電改を思い浮かべた。それと同時に多数の考えが浮上した。先ほどの零戦に乗っているパイロットが自分の愛機になにをするか分からない。もしかしたら奪われるかもしれない。そう思うと、木の根などを蹴っている場合ではない。

菅野は自分の愛機、それと零戦のパイロットがいるであろう飛行場に全速力で向かった。

◇坂井 三郎

「頼むから上手く止まれよ。」

坂井はドーンとレスと交戦中、謎の扉に吸い込まれて、この島に送られてきた。

零戦の機体には機銃弾を受けて開いた穴があり、発動機にも同様の痕が見られ、そこからは燃料が漏れている。

そして今、坂井は島の上空を飛行している時に見つけた飛行場に着陸しようとしていた。

着陸に失敗すれば自分も零戦もただではすまない。炎上して、爆発、そして最後には死だ。

零戦がランディングギアを展開、着陸体制に入った。

「止まれ・止まってくれ。」

コックピットのガタガタと振動が伝わる。ギアが地面に着いたのだ。ランディングギアが地面に着いてしまえば、そこからは簡単。ブレーキをかければ良いだけだ。

「う・おお。」

上手くブレーキをかけられたようだ。零戦は止まった。坂井は発動機を止めて、風防を開けて外に出た。回りに広がる大自然より先に、目についた物があつた。

それは、航空機だった。自分の他にもパイロットがいる。回りを見渡した。だが、パイロットらしき姿は見当たらない。

「これは・なんだ？見たことがない飛行機だ。戦闘機か？」

坂井は戦闘機の回りをぐるりと一週した。左に回ったとき、左翼に目を止めた。大きな破孔が出来ていた。破孔のある場所には機銃が内蔵されていた。

「機銃が爆発したのか？整備兵も気を緩めてるな。」

その戦闘機を眺めていると、後ろからガサガサと物音がした。

坂井は咄嗟に身構えた。もしかしたら米兵かも知れない。と、警戒したのだ。

だがそこから現れたのは米兵ではなかった。

「ああ!?手前エ!!俺の愛機に触んな!バカヤロウ!コノヤ・あ?」

目の前にいたのは、自分と同じ服装の日本兵、恐らくこの戦闘機のパイロットだろう。

「君は・誰だ?」

「343空301飛新撰組隊長、菅野 直大尉でエあります!」

菅野はニヤつと笑いながら敬礼をした。

「菅野大尉か・分かった」

「自分は、坂井 三郎。階級は中尉であります」

坂井も菅野に敬礼を返した。二人とも敬礼を崩し、現状の把握を始

めた。

菅野と坂井はこの島に送られてきた経緯を話した。

菅野はB―24爆撃機と交戦中、左翼内の機銃筒が爆発、列機の2番機が護衛を始めたが、空戦は終わっていない。空戦に戻るよう指示して数分後に謎の扉に吸い込まれ送られてきた。

坂井は、F4Fの編隊を全機撃墜後、飛行中の別編隊を視認。F4Fとドーントレスを誤認し後部銃座の機銃弾を機体に受け、燃料漏れを起こして、基地に帰還中、菅野と同じく謎の扉に吸い込まれてこの島に送られてきた。

二人の共通点は、死に際に立たされていること、そして、謎の扉に吸い込まれたこと。この2つだった。そこから坂井はなんともおかしな仮説を打ち立てた。

「死に際に立たされると、あの扉が現れてここに送られてくるんじゃないか？」

「要するに、死にかけたらこっちに来るって事か。ならもつという筈だ！死にかけてる奴ア！俺の仲間だつて死にかけてる奴は沢山いる！なんでそいつらが送られて来ねえんだ!!」

「菅野大尉、落ち着いてくれ。俺達が送られて、他の兵は送られてこなかった。もしかして、俺達は選ばれたから送られてきたんじゃないか。」

「選ばれて送られてきた。んだよ、そりゃあ。」

「そのまままだ俺達は選別されたんだよ。どこの誰かは知らないが選別をしていたんだ。」

「選ばれてここにいんのかよ。どこの物語だ!!」

菅野は軽くツツコミを入れたが、坂井受け流した。

「菅野大尉、他にも情報は無いか。この島の情報は出来るだけ知っておきたい。」

「ああ。そういや俺が送られてきた時だったか。ボロい建物の前に、誰かいたな。黄色い服着てよ。緑の袴はいてたな。」

「ああ。その建物なら見たぞ。呉にも横須賀にも似たものがあつただろう？確か。鎮守府って言ったかな。だが、そのような人は見ていな

い。まず、鎮守府跡の前に人なんていなかったが。その情報は確かか？」

「俺アこの目でしつかり見た!!確かにいたんだよ!!」

「分かった、まあ、落ち着いてくれ」

坂井は情報交換を一旦打ちきり、その鎮守府跡に向かおうと、提案をした。

菅野は「俺はそこに行こうとしたんだよ!そしたら発動機の音がしたから、戻ってきたんだ!!」と、ここに戻ってきたのを坂井のせいにするように怒鳴った。坂井は苦笑しながら菅野を落ち着かせた。

「それでは、菅野大尉。鎮守府跡までの道は分かるか?」

「んなもん知るわけねえだろ。さっきだって勘で森ん中歩いてたんだ。だけど、鎮守府跡の方角からして向こうだろうな。真っ直ぐ進みや、いつか着くだろ」

菅野は自分の愛機である戦闘機、紫電改の後部に広がる森を指差した。

「そうか、向こうへ進めばいつか着く。随分と雑な説明だったが、方角が分かるだけましたな」

「だろ?そうと決まりや、さっさと行こうぜ!」

「ああ、そうだな」

戦闘機パイロットの二人は、鎮守府跡があるであろう方角を真っ直ぐと進んでいった。



艦娘、提督、パイロット、集合！

◇菅野 直&坂井 三郎

「坂井サンよお。こんな慎重に進む必要あるか？」

「ああ、もしもの事を考えるんだ。」

坂井と菅野は、飛行場で合流した後、鎮守府跡に向かおうと話をしていった。

そして今、二人は鎮守府跡に向かっている。

だが、菅野は坂井の進み方に不満そうだった。

なぜかというと、

「こんなに姿勢低くしてよお。ゆっくり進むより走って移動した方が良くねえか？」

「いや、ダメだ。もしかしたら、敵がいるかもしれない。」

「へいへい。分かりやしたア。」

菅野は不服そうに返事をした。

すると、坂井はピタツと足を止め、手を挙げた。

「止まれ」の合図だ。菅野は「もしかしたら怒られるんじゃないかか？」と思ったがどうやら違うようだ。

「この音。まさか。菅野大尉、急ぐぞ！もしかしたら出口が近いかもしれない！」

「あア!? さっき言ってた事と全然違いやねエか!!」

坂井は先程言っていた事を忘れたかのように無我夢中で走った。

「あの音が聞こえたということは、近いぞ！」

「ちよ。おい!!」

二人はがさがさと草を掻き分けながらどんどん進んでいった。

次第に音も大きくなり、坂井は確信した。

「この音は。波の音だ。となると、海が近い！」

「海だア? じゃあ、鎮守府跡が近えって事かア!？」

「そうだ! 早く行くぞ!!」

「さっき言ってたのはなんだったんだろうなア。まあ、考えても仕方ねエか。」

そして二人は森を抜けた。すると目の前には坂井の予想通り、海が広がっていた。

そしてもうひとつ、鎮守府跡があった。

菅野はその外見に少し違和感を覚えた。

「なんだ・さつきより綺麗になつてねエか？・気のせいかな？」

菅野が見た鎮守府跡は最初に見た時より変わっていた。

最初に見たとき、赤レンガが抜けているところがあつたが、今はそれが見当たらない。

代わりのレンガが埋め込まれている。回りの雑草もあらかた刈られており、鎮守府跡ではなく、今すぐにでも使える鎮守府になっていた。窓ガラスは割れており、そこから中を覗き込むと、蜘蛛の巣が張り、蔦が割れた窓ガラスから内部に侵入していて、床を見ると、赤いカーペットはあるものの所々破れており、一部カビの生えているものもあつた。

「汚ねえな・なんで外装だけ綺麗にしといて中は掃除しねエんだよ。」

菅野が鎮守府の内部についてブツブツ言っている後ろで、坂井は海を眺めていた。

「本当に・ここはどこなんだ・敵の艦隊も見当たらないし・何の為に俺達は送られてきたんだ。」

「坂井サンよオ！とつと中入つちまおうぜ！ずっと外にいてもなんの解決にもなんねえ！」

「あ・ああ、そうだな。」

坂井は菅野に呼ばれ、はつと我に返り、「そうだ、まずは事の進展を望まなければ・このまま外にしていると、野宿することになる・野宿するとしたら・洞窟を見つけるか、穴を掘るか、コックピットの中で寝る・しかないな」と、考えを張り巡らせた。

「そうと決まりや、とつとと行くぜ！」

菅野は鎮守府の重々しい扉を開けると、すぐに叫んだ。

「誰かいねえか!? オイ！いたら返事しやがれ！コノヤロウ!!」

「誰だア？少しは静かにしろ。」

「誰だテメエ！って。あ？」  
「菅野大尉！少しは発言を。って、貴方は。」  
「山口少将！」  
「山口・あの殺人し多聞丸かア。く。ふはは。」  
「どわつはははははは!!生きとつたんかワリヤ！」  
「出会ってすぐに人殺し、そして大笑いか。大西を思い出すな。まあ、そんなこたあ置いておいて、坂井一飛曹、君のことは存じ上げているが、そちらは？」

「343空301飛新撰組隊長、菅野 直大尉でえあります！」

「多聞丸は、MIでおつ死んだハズなんですけどねえ。」

菅野はニヤリと笑った

「大尉、貴様いつこつちに送られた？」

「1945年8月1日！」

「ここで聞くのもなんだが、日本はどうなった？」

「菅野大尉、私もどうなったのかを知りたいんだ。教えてくれ。」

「勝ったか負けたか聞かない辺り、流石ですなあ、お二人さんよオ。」

「何もかんも灰も同然!! 聯合艦隊も壊滅！」

「大和も武蔵も海の藻屑と果てましたぜ」

多聞と坂井は無表情のまま「そうか。」と答えた

「だがな、大尉」と多聞は続けた。

「聯合艦隊は滅んじやいない。飛龍がここにいる」

「飛龍ウ？あの空母もMIで沈んだハズじゃなかったかア？」

「確かに飛龍は沈んだ。だがな。ここにいるんだよ」

「だから、どこだ！どこにいます！」

「飛龍よ！来て良いぞ！」

「分かったよ、多聞丸！」

一二階から元気な声が聞こえてきた。すると程なくして、どたどたと走ってくる音が聞こえた。

「呼んだ、多聞丸？って、この二人は。」

「菅野大尉、これが誰だか分かるか？」

「ああ、山口少将。まさか、ソイツが飛龍とでも言っていてえのか？」

「そのまさかだ。この女性は間違いなく、飛龍だ。私と会って、開口一番言った言葉が多聞丸だからなあ。あと久しぶりとか言ってたかなあ。」

多聞はタバコに火をつけ、口にくわえた。

「スゲエなあ。空母が人間になんのかよ。」

「人間みたいな外見だが、身体能力は人間を遥かに上回るらしい。艦娘って呼ばれてるそうだ」

「艦娘ねえ。」

「山口少将、飛龍に搭載されている飛行機を教えてくださいませんか？」

「ああ。それなら本人に聞けば良いだろう？」

「そうでした。では、飛龍。搭載されている飛行機を教えてくださいませんか？」

「え？搭載してる飛行機？えーつとね、零式艦戦二一型、九七艦攻と九艦爆だよ？」

「ハツ・MIと変わんねえなあ。」

「あとは、菅野大尉、坂井一飛曹の航空機もあるんだろう？」

「ありますが、損傷していて、私の零戦は機銃弾を受け、発動機に被弾して燃料漏れを起こしています。そう長くは飛べません」

「俺の戦闘機？紫電改っていう飛行機だ。B-24爆撃機と交戦中に左翼の機銃筒が爆発してよオ、飛べなくはねえが、機銃を撃つと右翼の機銃筒も爆発しかねない。だからあんまり攻撃は出来ねえ」

「そうか。飛龍よ、この二人の戦闘機、直す事は出来るのか？」

「出来る限りやってみるけど、この鎮守府、工廠ってないのかな？」

「それなら裏手にあるぞ。何か用事でもあるのか？」

「妖精さん探してくるね！」

そう言うと飛龍は鎮守府の裏に向かっていった。

「妖精さんって、何だア？」

「知らんなあ。」

「私も知らないな。」

三人は頭の上にはてなを浮かべた。

◇飛龍

「妖精さん、いるかな？」

飛龍は工場の扉を開けた。

すると、中はかなり荒れていた。

工具は散らかり、オイルがこぼれていた。

「誰？」

「誰か来たの？」

「お客さん？」

「やっぱりいた！」

「あ、艦娘だ！」

「もしかして、飛龍さん!？」

「飛龍だけど、お願いがあるの！」

「なになにー？新しい艦娘の建造？装備の開発？」

「えーっと、直してほしいものがあってー」

「直してほしいものー？」

「うん、あちよつと待ってて？」

「分かったー」

「航空隊、発艦！」

弓を引いて矢を撃った。すると矢が4機程の零戦の小隊に変わり、大空に舞った。

「島を隅々まで探して！駐輪中の飛行機があったらその上を旋回しながら飛行して！すぐ向かうから！」

飛龍は航空隊に命令を出すと、また工場へ向かった。

「さっきの直してほしいものなんだけど、戦闘機なんだ」

「戦闘機？ってことは、航空機を直せば良いの？」

「うん、資材はあるから！」

「ボーキサイトと鉄鋼、あと燃料があれば十分だよ！」

「分かった！あとは、連絡さえくれば。」

飛龍が工廠を出た瞬間、連絡が来た。

「我レ、駐輪中の航空機ヲ発見セリ」

「見つけた！流石私の子！」

飛龍が空を見上げると、島の中央付近で零戦が旋回飛行している。

「あそこね・妖精さんを数人連れていった方が良いかな。」

「妖精さん！飛行機見つけたから来て！」

「自分の足で行くの!？」

「あー、いやいや、私が連れていくから」

「ホント!?!ありがとー！」

飛龍は肩と手に数人の妖精を乗せて島の中央へ向かった。

「へえ、これがあの二人の戦闘機か。」

飛龍が零戦と紫電改を見上げている傍らで、妖精達は被弾箇所を全て見極め、どのような修理をすればいいか話し合っていた。

「ここに、あれを。」

「ここをこうして。」

「これでいけるかな。」

「やってみなきゃ分からないよー！」

「二りよーかいっ！」

妖精達は早速戦闘機の修理に取りかかった。

トンカントンカンと金槌の音が響くなか、飛龍はもう一度航空隊を発艦させた。

なぜかというと、鎮守府にいる三人を呼ぶためである。

修理が終わって、2機の戦闘機を放っておくのはあの二人に悪い。

「鎮守府にいる人達を呼んできて！お願い！」  
航空隊は速度を上げ、鎮守府跡に向かっていた

.....

。

戦闘機の修理が終わって、やっぱり敵が攻めてくる。

◇菅野 直&坂井 三郎

「アイツ、戻ってこねエけど、何してんだ？」

「妖精を探しに行く』って言ったきり、戻ってこないな。」

「飛龍の事だ。何か考えがあるんだろう」

菅野、坂井、多聞の3人は工廠に行った飛龍の帰りを待っていた――

だが、一向にして飛龍が帰ってこない。かれこれ数時間は待っている。

「なア、どうする、提督さんよオ？探しに行くか？」

「鳴かぬなら、鳴くまで待とう、ホトトギスって句が有るだろう？気長に待つしか・無いだろうなア」

多聞はポケットから煙草を取り出すと、ライターで火を付け、吸い始めた。

出会ってすぐに、菅野にも煙草を勧めたがきっぱりと断られてしまった。

「ああ・クソツッ！ちよいと外歩いてきますぜ！」

菅野は扉を開け外に出た。すると森の方向から音がしてきた。

間違いなく飛行機の発動機の音。

「また誰か来たのかア。」

だが、予想は大きく外れた。菅野はこの島に送られてきた者だと思っただが、それを見て驚愕の表情を浮かべた。何故驚いたのか。理由は簡単だった。飛んでいる航空機のサイズだ。

まるで子供が遊ぶ玩具のような大きさの航空機だった。それが編隊を組んでこちらへ向かってきた。

「っ！！坂井サンよ！おい・坂井一飛曹！！」

「呼んだか？」

！！

「大声で呼んだよ。そんですぐに来ねえのもどうかと思いますぜ？――

――それより、あれを見てくれ」

「あれ。」

？



坂井は不思議そうに空を見上げた。するとそこには、菅野が見た物と同じ景色が広がっている。

子供の玩具程度の大きさの航空機、それが向かってきている。

「菅野大尉、あれは。」

「どっからどう見ても九七艦攻だろうな。でも、小せえ。」

そんな話をしていると一機の艦攻が降下してきた。

そして艦攻のパイロットが人差し指を立て、自分の後方に広がる森を指差した。

「戻れ。ってか？飛行場に。」

「それだろうな。俺達の戦闘機に何かあったのか。」

その言葉を聞くやいなや菅野は無言で駆け出し、単身で森の中へ入っていった。

「菅野大尉！おい。待て!!」

菅野には坂井の声が届いていない。今、菅野の頭の中にあるもの、それは戦闘機の事だけだった。!!

「俺の愛機に。触るんじゃねえ。バカヤロウ!!」

菅野はひたすらに森の中を走っていった。

「オラァ！手前え！人の愛機に触んじゃねえ!! オイ。って、んだ。こりやア。」

島の中央、飛行場に到着した菅野はまた驚愕の表情を浮かべた。何故なら、目の前には先程とは比べ物にならない程の光景が広がっていたからだ。

零戦と紫電改があるのは変わらない。変わったのはその二機の外

見だ。

零戦は先程まで無数の銃痕が残っていたが、今はその痕すら見当たらない。

紫電改に至っては、左翼の破孔が修理され、所々剥がれていた装甲板も張り直されている。！

「修理したのか。この短時間で。ふ、ふはは。面白えなア。この島ア！」

「菅野大尉。っはあ。はあ。あまり先に行かないでくれ。見失うと面倒だ。って。これは？」

「知らねエ。来たらもう完璧に修理されてやがった。おまけに、塗装もしてくれてらア。」

「俺の零戦も直ってる。発動機の弾痕も。無い！これで、これで、また翔べる！」

「あ、来た来た！随分遅かったね？」

声のした方を向くと、飛龍が立っていた。

二人を待つていたようだが、菅野と坂井は疑問に思う箇所を見つけた。

それは飛龍の肩だった。なぜ肩に目があったかと言うと――

飛龍の肩に小さい人間が乗っていたからだ。

「なア、飛龍よ。その、肩のソイツあ。何だ？」

「え？これ。って、妖精さんが見えるの!？」

「普通に見えるぞ。坂井サンはどうスか？」

「あ。ああ、見えるが？」

「へえ。面白いなくこの人たち。」

「何が面白エんだ!？アア!？」

「妖精さんが見えるっていう人はあんまりいないの。唯一、見れるのが艦娘と艦娘の素質のある人達だ!でも二人の場合は、良く分からぬ。なんで見えるんだろう。」

「戦闘機乗り、というのが影響しているのか。」

「ま、まあいいや!この話は置いておいて、二人の戦闘機について、話があるの。えーつと、見ての通り、この二機は修理したから。いつ

でも飛べるよ！」

「ああ、協力に感謝する」

坂井は敬礼をした。菅野は紫電改の方へ行ってしまった。勿論、敬礼もせずに。

「まったく。」

「いいんですよ、いいんですよ！」

と、談笑をしている所に、ドオン・と砲撃音が聞こえてきた。

飛龍は先程発艦させていた航空機に現状の報告を要求した。すると――

「敵空母ヲ視認！我レ、攻撃ヲ開始ス！」

と、無線が入った。

「敵空母・まさか。」

飛龍の脳裏に嫌な想像が浮かんだ。敵空母。妖精が敵空母と言ったのだ。

飛龍にとって、いや、艦娘にとって敵空母と言うと、一つしかない。『深海棲艦』が出現したのだ。

しかも空母。相手は艦載機を持っている。自分も航空機を発艦させようとするが、「空母一隻で勝てるのか」という考えが先に浮上した。だが、その考えもすぐに吹き飛ばされた。

相手も一隻しかいない。これなら、勝てる、と。

飛龍は意を決して航空隊を発艦させた。

「第一次攻撃隊、発艦！」

「なんだア？敵か？」

「そのようだな。行くか？」

菅野は不適な笑みを浮かべ、「ああ、もちろんだ。」と言ひ紫電改に乗り込んだ。

坂井も領き、零戦に乗り込んだ。

飛龍は二人が出撃しようとするのを全力で止めた。

「いくらあなた達がいても、敵わない！出撃はしないで！」  
「うるせエ!!!」

飛龍はビクツと震えた。

「なアにがお前らじゃ勝てねエだ!! やつてみなきや分からねえだろ!!」

「で・でも!!」

「でもじゃねえ!! 俺らは何機もの艦載機を相手にしてきてんだ!! 負けるわけがねえ!」

「分かったよ。でも、二人とも、死なないでよ。」?

菅野はニヤツと笑い、「当たり前だ!」と言い残すと風防を閉め、前を向いた。

「戦闘301飛行隊新撰組隊長、菅野 直! 出撃ス!」

菅野は紫電改のスロットルを上げた。坂井の搭乗している零戦もそれに続く。

二機の戦闘機が空中に浮いた。

『菅野デストロイヤー』こと菅野 直『大空のサムライ』こと坂井 三郎。

二人の撃墜王が大空へ再び舞い戻った。

## 空中の乱戦

◇菅野 直&坂井 三郎

「敵空母出現つっても……戦闘機じゃ沈めらんねエじゃねえか! どうすんだ!？」

「それに関しては飛龍が何とかしてくれるだろう。俺達は制空戦に集中すればいい……」

二人は孤島の飛行場跡で修理された戦闘機と飛龍を発見し、話し合っていたところ、飛龍の艦載機から『敵空母発見』との知らせが入る。その事を二人に伝えた飛龍は、「危ないから行かないで」と二人を止めようとしたが、意気揚々と戦闘機に乗り込んでしまった。

飛龍は「これじゃ、止めても無駄かな」と思い、「死なないで」と二人に告げた。

菅野と坂井は戦闘機を発進させ、今に至る。

数十分飛行を続けていると、鎮守府港の目の前に広がる海に黒い点がいくつか見えてきた。

菅野と坂井はそれを見るなり、驚愕の声を上げた。

「なんだ……ありゃ……」

「あれが空母だと……? 人間の形をしているじゃないか……それに、上空を飛んでいるのが直掩機? プロペラが無い……どうやって飛んでいるんだ……!」

そこに見えたのは航空機概念を崩壊させるような物体。そして海上には、人間の姿をした黒い少女が佇んでいる。頭についている大きな口から艦載機が発動しているようだ。

「坂井サンよ……制空戦に集中しろって、さっき言ってたよなア? んじゃ、あれ全部、墜として良いんだな?」

「鎮守府を攻撃している時点で、もう敵だ……躊躇いなんていらなさ……墜としまくるぞ! 撃墜数勝負と行こうじゃないか!」

「面白エー! 受けて立つ!」

菅野の乗る紫電改、坂井の乗る零戦。

2機の戦闘機が敵艦載機に向けて接近していった。

菅野達の接近に気づいたのか、敵の艦載機もこちらに向かってくる。

「ハッ！空中戦で勝てると思ってんじゃねエぞ！バカヤロウ！」

菅野は迷わず、正面から機銃を発砲した。

だが、当たらない。サイズが違いすぎるのだ。

菅野達の乗る戦闘機は実物大。8 m程の大きさだ。それに比べ、敵の艦載機はせいぜい1 m弱。機銃がまともに当たるはずがない。そこで菅野は、

「当たんねエなら…コイツあどうだア!？」

操縦桿を横に倒し、機体を捻らせ、バレルロールを始めた。

菅野の狙いは一つ。敵艦載機、だが機銃は当たらない、ならどうする。

答えは一つだ。

——『物理的に接触して墜とせばいい』

菅野は紫電改の翼を敵艦載機にぶつけるという無謀な作戦に出た。スロットルを上げ、接近、ゴシヤツという凄まじい音と共に敵艦載機が砕け散った。

向かっていたもう1機の艦載機には、坂井の乗る零戦がピッタリとくっついていた。

坂井はトリガーを引き、20 mm機関砲を撃った。すると、敵艦載機に命中、見事撃破した。

「やるじゃねエか！俺も負けてらんねエ！」

菅野は敵艦載機を見つけるやいなや発砲した。命中精度は格段に上がり、撃てば必中だった。

坂井も負けじと艦載機の後を追ひ、次々と撃破していった。

だが弾も無限にある訳ではない。特に、零戦の機関砲の弾数は比較的少ないため、すぐに弾切れを起こしてしまう。

「弾切れか…菅野大尉！弾の残弾は？」

「もう切れてやがる…！一旦帰還するかア？」

「だが、肝心の敵空母が残っている…爆撃機か雷撃機はいないのか…？」

その時だった。敵空母がいきなり爆発したのだ。

菅野と坂井は空母を見つめていた。するとその場から離れていく九七艦攻が見えた。

自分達が乗っている物よりはるかに小さい。

飛龍の物かと思っただが、尾翼番号をみた瞬間、坂井は驚きを隠せなかった。

——『A I—301』

航空母艦“赤城”所属の艦攻。しかも、あの機体番号は真珠湾攻撃の際、水平爆撃を指揮した淵田美津雄の機体の番号だった。

坂井はもう一度空母を確認すると、どうやら今の爆撃で撃沈したようだ。

そして、帰還する九七艦攻の後を追った。

——後を追いつけて数分。

坂井は赤い袴をはいた少女を見つけた。